

札幌国際大学
地域・産学連携センター一年報
第9号

札幌国際大学
地域・産学連携センター

札幌国際大学
札幌国際大学 地域・産学連携センター年報
第9号

目 次

<事業報告>

1. 令和6（2024）年度 地域・産学連携センター公開講座 [今金町]
今金町・地域連携事業報告
佐久間 章・本多 理紗 pp1-6
2. 令和6（2024）年度 地域・産学連携センター共同研究 [札幌市清田区]
清田区の高齢者を対象とした脳の活性化トレーニング
国田 賢治・佐藤 文亮
(協力)札幌市清田区、清田 Hi 遊会..... pp1-7
3. 令和6（2024）年度 地域・産学連携センター共同研究 [札幌市及び公財]札幌国際プラザ]
『札幌市の国際化推進等に関する連携協定』連携事業：「多文化共生社会創成プロジェクト」報告書
陳 堯柏・[国際課]松村 知美
(協力)札幌市教育委員会 pp1-7
4. 令和6（2024）年度 地域・産学連携センター共同研究 [沼田町]
沼田町とのスポーツ健康領域に関する連携事業に関する報告書
佐藤 文亮・国田 賢治 [p1], pp1-7

2024 年度今金町地域連携事業報告

1 事業の背景及び目的

札幌国際大学は、令和 2 年度より中期計画に基づき、スポーツクラブの設立に向けた準備をすすめ、令和 4 年 4 月、「SIU スポーツクラブ」として、スタートをきった。その目的は、次のとおりである。

- ①スポーツ活動を通して、清田区民の健康の増進を図り、地域社会(清田区)への貢献に資する。
- ②スポーツ人間学部の教育活動における実践的な学習の場とする。
- ③清田区民と本学学生及び教職員との交流を深め、コミュニティの形成に寄与する。

一方、本学と地域連携協定を平成 24(2012)年度に締結した今金町は、農業が盛んで日本一の「今金男爵」など多くの農産物をはじめ、美しい自然環境、歴史的史跡も数多く残されており、地域資源に恵まれた自治体である。しかし、人口減少や少子高齢化の進展による地域課題も山積している。とりわけ、町民の健康の維持・増進は重要な課題となっており、健康のためのスポーツ等の活動機会の拡充が求められるところである。

そこで本事業では、地域連携協定のもと、本学と多彩な連携事業を展開してきた実績のある今金町をフィールドとして、大学が有する資源であるスポーツクラブ事業をアウトリーチすることによって、地域課題である健康の維持・増進に寄与しようというものである。

2 高齢者対象「健康特別教室」の概要

(1)日時 令和6年8月7日(水) 午後13時30分～

(2)場所 クアブラザピリカ 交流棟 大広間

- ①開会あいさつ 今金町副町長 森 朋彦 氏
- ②札幌国際大学スタッフ自己紹介
- ③健康特別教室プログラム
 - i アイスブレイク
 - ii リズム 体操(YMCA
 - iii 脳トレ
 - iv タオルを使用した家でもできる体操や筋力トレーニング
 - v レクリエーション(バグゴ)アメリカ発祥のニュースポーツ体験
- ④実施内容に関する感想・口頭アンケート実施
- ⑤閉会

3 事業の成果と課題

11 名の参加者であったが、9 名の学生が 1 人ひとりをしっかりサポートをし、安全に配慮をしつつプログラムを進めることができた。参加者の感想は以下である。

「普段みんなで集まる機会がないし、いつも使わない筋肉などを使うことができてとても楽しかった。」

「スポーツをしといる人の若いフレッシュなパワーをもらった。」

「楽しかった。脳トレは普段しないので申請だった。笑いがあってまたやりたいと思った。」

「背筋や腰が伸びたので良かった。家でもできるので家でもやりたい。」

「また参加したい。ゲーム(バグゴ)が一番楽しかった。」

「パワーをもらった。」

「全部楽しかった。若い人に元気をもらえたとし、いっぱい笑った。」

「タオル体操など、夫婦で家の中で一緒にやりたいと思った。」

「バグゴは距離も玉の軽さも良く、とても楽しかった。」

「全部初めて経験することなので面白かった」

「若い人とはしゃげて楽しかった。」

「来年もやりたい。」

参加者 11名全員が「楽しかった」との感想があり、とても好評であった。

学生の4年生に関しては、3年生の動きを見守り、3年生は自らがプログラムを立案し、資料や道具の準備を行い、各それぞれの種目ごとに責任を持って進めることができた。参加者とのコミュニケーションを上手にとり、臨機応変に行動し対応している姿が見られた。学生は、実践を通して準備の大切さや高齢者との関わり方、プログラムの運動強度の設定や内容、安全管理等を再認識し、学ぶことができたと考える。

今後の課題として、継続して実施してほしいなどの感想が多くあったように、健康維持・増進へつながるような事業の展開を実施できる方法を考えていくことが必要であるとする。

4 活動の様子及び資料





BAGGO

バッグー

BAGGOの道具紹介

傾斜ボード



ビーンバッグ



BAGGOあそびの概要



BAGGOはアメリカ発祥のニュースポーツで2つのボードを向かい合わせに置き、2チームに分かれてビーンバッグを投げ、得点を競います。

ボードに乗れば1点、穴に入った場合は3点、ボードに乗ったバッグに当てて穴に入ると、ボーナス得点。

激しい動きがなくルールも簡単な上、アウトドア、インドアどちらでも楽しめます。

BAGGOルール

(1)ジャンケンで勝ったチームが先攻、後攻、あるいは投げるポジションを決めます。



(2)ボードをめがけてバッグを投げ、ゲームスタート。投げる際にスローイングラインを踏み越してはいけません。



BAGGOルール

(3)ホールに入った場合は3点、ボードの上に乗った場合は1点となり、さらにボード上のビーンバッグと一緒に穴に入れた場合は6点のボーナス得点となります。

(4)どちらか21点先取するまで続けます。(時間設定した場合は11点先取にしたり、ラウンドを規定してどちらかのチームが得点を取るかによって勝敗を決める場合もあります)



BAGGOルール

(5)第2ラウンドは選手交代して、的になるボードも替わります。

(6)第1ラウンドで得点の少なかったチームが「後攻」で、投げるポジションを決められます。あとは、第1ラウンドと同様にプレイします。

※競技時間の設定はありません。1チーム2人、2チームでゲームを行います。



YMCM歌詞

- ・ヤングマン さあ立ちあがれよ
 - ・ヤングマン 今翔びだそうぜ
 - ・ヤングマン もう悩む事はない
 - ・ヤングマン ほんだから
 - ・ヤングマン ほら見えるだろう
 - ・ヤングマン 君の行く先に
 - ・ヤングマン 楽しめる事がある
 - ・ヤングマン ほんだから
- すばらしい Y.M.C.A.
Y.M.C.A.
ゆううつなど 吹き飛ばして
君も元気出せよ
そうさ Y.M.C.A. Y.M.C.A.
何でもできるのさ

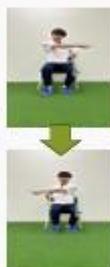
イントロ♪



イントロで足踏みをします。

・ポイント

1. 腕をしっかり大きく振る!
2. 足を力強く踏み込む!
3. リズミカルに!



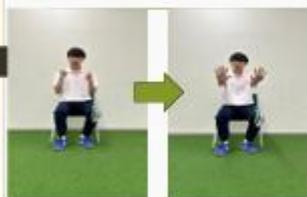
ヤングマン さあ立ちあがれよ
ヤングマン 今翔びだそうぜ
ヤングマン もう悩む事はない

指を指しながら右・左と円を描くように動かします。

・ポイント

1. 大きく広くを意識
2. 右・左2回ずつ

ヤングマン ほら見えるだろう
ヤングマン 君の行く先に



グッパーのタイミングで胸の前で両手でガッツポーズをした後に腕を前に伸ばします。

・ポイント

1. 胸にしっかりと引き寄せる
2. 肩甲骨を引き寄せるイメージ
3. うでをしっかり伸ばす

ヤングマン 楽しめる事があるんだから



グッパーで次は上に腕を伸ばします。

・ポイント

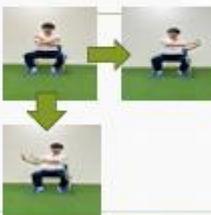
1. 肩甲骨を寄せるイメージ
2. 上に腕をしっかり伸ばす

すばらしい Y.M.C.A. Y.M.C.A.



サビの前に4回手拍子したあとにYMCAを手で大きく表現します。

ゆううつなど 吹き飛ばして
君も元気出せよ



腕を胸の前でクロスさせて2回ポンポンしたあと、右からハイタッチをするようにトントン、左も同じようにトントン。

・ポイント

1. 右・左をしっかりと見てトントン
2. リズミカルに!

そうさ Y.M.C.A. Y.M.C.A.
若いうちはやりたい事
何でもできるのさ

・このサビは1回目の
サビと同じ動き!

最後に!



最後にじゃんけんです。
その日の運勢やタイミング、
いろいろ運試しにビッカリ!
その日によって勝ってもらるか
負けてもらうか気分が決まります!
楽しんでみてください!



背伸び



タオルの両端を持って腕を上には伸ばします。
深呼吸しながら背筋を伸ばします。

脇伸ばし



背伸びの体勢から少しずつ横に倒れていきます。
身体の側面を伸ばすように意識しましょう。

腰ひねり



腕を前に伸ばし、ゆっくりと腰を横にひねります。
腕は地面と平行に、背筋が曲がらないように気を付けましょう。

脚裏伸ばし



タオルをつま先の裏に掛け膝を伸ばし、かかとを地面に付けたまま引き寄せます。
アキレス腱やふくらはぎの裏を伸ばします。

タオル引き



二人組で、片方は軽くタオルの真ん中あたりを持ちます。
もう片方が端から指の力だけでタオルを手繰り寄せます。
タオルを持つ力で負荷を調節することができます。

タオル返し



二人一組でタオルの両端を持ちます。
「せーの」の合図で同時に左右どちらかにタオルを返します。
このとき手首の力を使うように意識しましょう。
同じ方向に返せたら成功！二人の息を合わせましょう！

清田区の高齢者を対象とした脳の活性化トレーニング

札幌国際大学スポーツ人間学部スポーツ指導学科	国田賢治
札幌国際大学スポーツ人間学部スポーツ指導学科	佐藤文亮

本事業の目的

平成 21 年度、本学と札幌市清田区との間で連携協定が結ばれた。この協定に基づき、高齢者の運動を通じた健康の維持・増進に関する地域連携事業を清田区および高齢者健康運動クラブの清田 Hi 游会と行っている。特に、平成 28-30 年度では、清田区内で春季から秋季にかけて実施されている地区ウォーキング中の心拍数測定を行った。この測定の結果、清田区内の地区ウォーキングは、呼吸循環系に対して最適な運動強度で実施されていることが明らかとなった。しかしながら、このウォーキングは冬季では実施されていない。北海道における冬季において、高齢者の多くが、運動不足であるとの報告を受けている。このことは、呼吸循環系の低下に限らず、身体機能の基盤となる脳の健康の顕著な低下にもつながるものと思われた。

我々は、先行研究において、スポーツを実践している大学生では、身構えた姿勢(頸部を前方に突出した姿勢:頸部前屈姿勢)を保持すると脳の活性化が生じ、眼球運動の反応時間が短くなるとの知見を得てきている。頸部前屈姿勢保持の主動作筋である頸背部筋へ振動刺激を行うと、眼球運動反応時間の短縮が認められるとの知見も得た。これらのことから、スポーツを実践している大学生では、頸背部筋からの感覚情報による脳の活性化が生じているとの知見を得た。さらに、スポーツクラブに所属したことの無い大学生を対象とした検討によると、この前屈姿勢保持による反応時間短縮がはじめは認められなかったが、前屈保持に伴う眼球運動反応トレーニングを 1 日に 5 分間、数週間行うと、頸部前屈保持に伴う脳の活性化トレーニング効果が生じるようになるとの示唆が得られた。

一方、高齢者で習慣的に運動を継続的に行っていない者は、頸部前屈姿勢を保持しても脳の活性化が生じないとの知見を得た。清田区在住高齢者を対象に、脳の健康の維持・増進につながる脳活性トレーニング法を開発することを念頭に、令和 3 年度から継続的に地域連携事業を行ってきている。

令和 5 年度は、スポーツを実践している大学生を対象に、新たに開発した振動刺激器を用いて、頸背部筋へ振動刺激を行うと、眼球運動反応時間が短縮することを確証した。令和 6 年度は、高齢者を対象とした頸背部筋振動刺激時の眼球運動反応時間のデータ収集を行い、頸背部筋への振動刺激時の脳の活性化作用について検討を行う。

以下に、(1) 高齢者およびスポーツを実践している大学生を対象に、新たに開発した振動刺激器を用い、頸背部筋への振動刺激時の眼球運動反応時間の変化の検討を報告するとともに、(2) 清田区および清田 Hi 游会との打ち合わせ状況について報告を行う。

(1) 高齢者およびスポーツを実践している大学生を対象にした、頸背部筋への振動刺激時の眼球運動反応時間の変化

1. 目的

頸背部筋へ振動刺激を負荷した場合に、筋感覚情報量が増大し、眼球運動反応時間が短縮するか、検討を行った。

2. 方法

被験者

被験者は、高齢者 18 名と、同じ競技歴を 4 年以上有する若年成人 20 名からなる。

装置とデータ記録

フレーム付きの椅子に被験者を座らせ、体幹の背面を垂直な背もたれにつけ、胸部及び腰部をアクリルベルトで固定した。両膝を約 90 度に屈曲し、両足をフットレストの上に置いた。

頸部前屈角は矢状面における肩峰点に対する耳珠の回転角とした。この前屈角は、肩峰を中心点とし耳珠までの距離を調節することができる角度検出器を用いて、安静座位時と同じ角度に保った。また、前庭器官からの感覚刺激が一定となるように、重力線に対する耳眼水平線の角度を安静座位時と同じ角度に保った。この角度は、振り子様振子を用いた角度検出器を側頭部に取り付けて検出した。また、頸背部の伸筋を可能な限り弛緩させる目的で、支持台にて頭部を固

定した。振動刺激時に頸部が伸展しないように後頭部に支持板をあてた。

僧帽筋へ振動刺激を行うために、僧帽筋直上の皮膚へ振動器(竹井機器 S-21208)の円柱状の突起(皮膚との接触面積 6.15cm^2)をあてた(図1)。振動周波数は 100Hz とし、振動の振幅は 0.5mm とした。振動刺激部位は、僧帽筋上部線維のほぼ中央とした。振動刺激装置にて加えられる僧帽筋への圧力は、振動器に取り付けたロードセルを用いて動ひずみアンプ(エー・アンド・デイ, AS1603)で検出した。測定開始直前に僧帽筋へ振動刺激装置を介して、振動せずに手動にて圧を加え、可能な限り筋を伸張し、その時の圧力を求めた。振動刺激負荷時には、最大の筋長とならないように、その約 70% の圧力を手動にて振動器を介して加えた。

衝動性眼球運動を誘発するために、視覚刺激装置(日本光電, SLE-5100)を用いた。視覚刺激用の左右の LED の点灯は、ファンクショナルジェネレータ(NF, WF1966)によって $2\sim 4$ 秒の任意の時間間隔で交互に行った(図2)。LED の高さはいずれも鼻根のそれと同じくし、LED 間の中心点と鼻根との距離を 50cm とした。LED は、視角が 20 度になるように、中心点から左右 10 度の位置に設定した。水平眼球運動は、電気眼球図法を用いて測定した。左右の外眼角部に表面電極をはり、前頭部中央にアース電極を置いた。電極の入力抵抗は $10\text{k}\Omega$ 以下にした。電極からの信号は、直流アンプ(日本光電, AN-601G)で増幅($\times 2000$)した。安定した電気眼球図を得るために、電極をはってから記録をするまでの時間を 20 分以上とした。

後の分析のために、ロードセル、電極及び視覚刺激器からの信号は、コンピュータ内の生体情報解析ソフト(Kissei Comtec)に記録した。

手順

測定に先立ち、僧帽筋が弛緩するように、深呼吸を行いながら上肢帯挙上筋の収縮と弛緩を数回繰り返した。僧帽筋の弛緩状態は、筋電図をモニターしながら検者が口答にて被験者に知らせた。また、交互に点灯する LED を追従する練習を 20 秒間行った。次に、下顎部を支持台に置き頭部を固定し、眼球運動反応時間を安静頸部姿勢と振動刺激負荷中に測定した。振動刺激負荷では、試行毎に頸部に伸展運動が生じる(緊張性振動反射)のを確認した後、後頭部を支持し測定に移った。

眼球運動反応時間の測定は各試行 30 秒間とし、各条件で 5 回ずつ試行した。

各試行の間に 3 分間の休憩を挟んだ。

データ分析

眼球運動反応時間測定時のロードセルからの信号、電気眼球図及び視覚刺激のデータは、16 ビットの分解能を持つコンピュータへ 1,000Hz のサンプリングで取り込んだ。視標の移動開始に対する衝動性眼球運動の反応開始の典型例を図 3 に示す。眼球運動反応時間は、視標の移動開始に対する衝動性眼球運動の開始の潜時とした

3. 結果および今後の検討課題

眼球運動反応時間の平均値と標準偏差を図 4 に示す。若年成人における安静頸部姿勢での反応時間は、 168.7 ± 12.6 ms であり、振動刺激でのそれは 160.1 ± 11.4 ms であった。振動刺激での値が安静頸部姿勢でのそれよりも有意に短かった。この反応時間短縮の結果から、スポーツ経験を有する大学生では、新たに開発した刺激器を用いた頸背部振動刺激によって、脳賦活作用が生じることが示唆された。一方、高齢者における安静頸部姿勢での反応時間は 203.0 ± 22.4 ms であり、振動刺激でのそれは 203.7 ± 23.2 ms であった。高齢者では、頸背部振動刺激を行っても、脳賦活作用が生じないことが示唆された。

令和 7 年度では、清田区在住高齢者を対象として、頸背部筋への振動刺激によるトレーニングを通じて、頸背部筋振動刺激による脳賦活作用が認められるようになるか検討を行う予定である。

大学生および高齢者のこれらのデータをもとに、高齢者を対象とした頸背部振動刺激による脳の活性化トレーニングにつなげる。

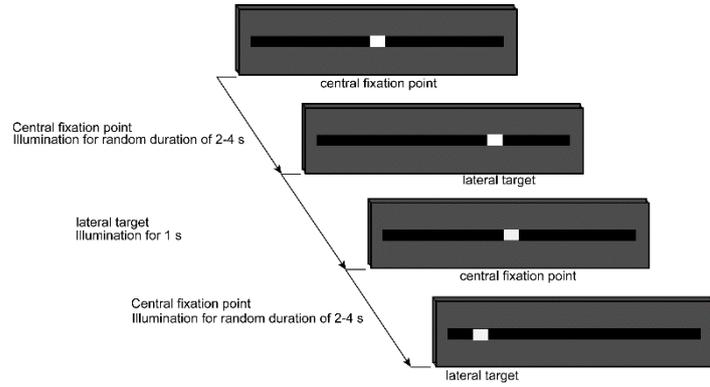


図 1 頸背部筋への振動刺激 図 2 視覚刺激

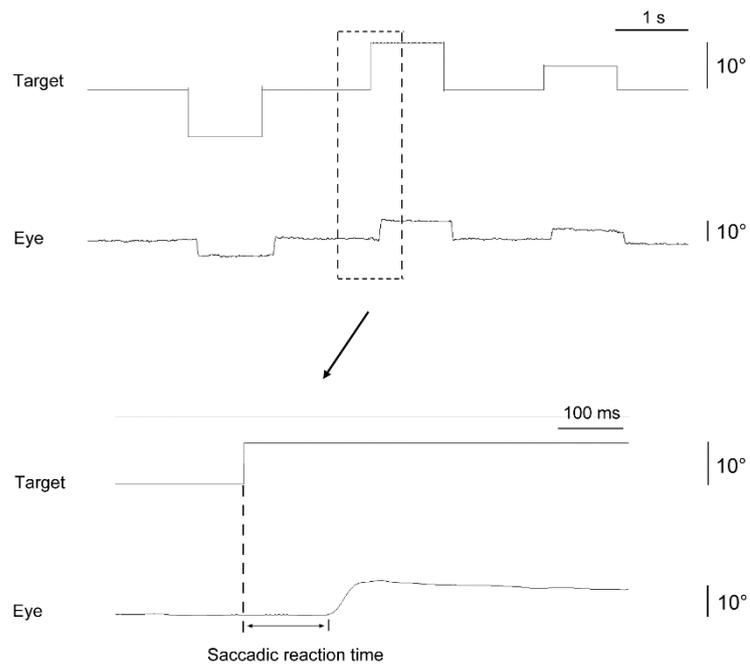


図 3 眼球運動反応時間の分析

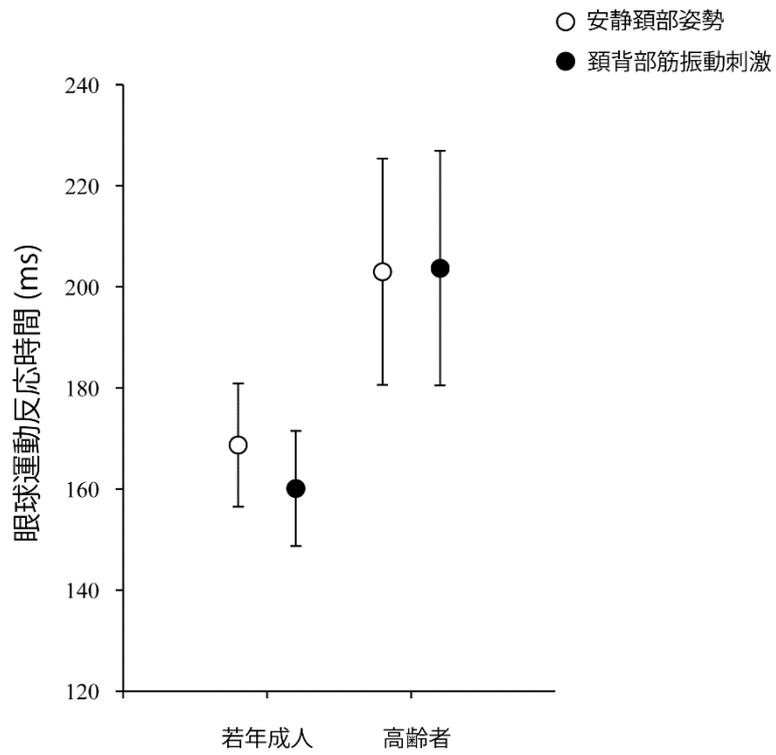


図 4 眼球運動反応時間の平均値と標準偏差

(2) 令和6年度の清田区役所および清田 Hi 游会との主な打ち合わせ風景

令和6年度の測定における清田区役所および清田 Hi 游会への趣旨説明を令和6年5月2日に行った。



5月2日の説明風景（清田区役所内の会議室）

『札幌市の国際化推進等に関する連携協定』連携事業

—「多文化共生社会創成プロジェクト」報告書

1. 事業の背景

日本では少子高齢化が進む一方で、高等教育や就職などのため来道外国人数は年々増加し続けています。総務省の発表によると、2024年1月1日時点で北海道の在留外国人数はすでに5万4,883人に達し、前年の同じ時点から1万673人増加しました。札幌市においても、2,216人増の1万7,867人となっています。

こうした中、札幌市は外国人住民と地域住民の双方が安心して暮らせる包摂的な社会の実現を目指し、2022年3月に（公財）札幌国際プラザ、札幌国際大学、札幌国際大学短期大学部の4者で、「札幌市の国際化推進等に関する連携協定」を締結しました。

この協定のもとで実施されている「多文化共生社会創成プロジェクト」では、札幌国際大学および札幌国際大学短期大学部の外国人留学生が札幌市内小中学校を訪問し、異文化交流活動に積極的に取り組んでいます。本プロジェクトを通じて、小中学生には異文化を理解することを通じて他者への尊重の気持ちを育み、国際的な感覚を養う機会を提供します。一方、留学生には日本の文化や風習への理解を深めてもらい、地域社会への帰属意識を高めることを目指しています。

2. 期待できる効果

○小中学生への影響：本活動では、取り組む単元や交流校との打ち合わせを基に、日本語・英語いずれかでの交流、または企画ごとに言語を使い分ける方法を採用しています。いずれの言語を使用する際も、「相手に伝わるように伝える」ことを意識し、視線や話す速度、声の大きさを工夫している姿が多く見受けられます。このような活動を通じて、コミュニケーション力が向上し、相手をより理解しようとする意欲が高まり、外国語学習へのモチベーション向上が期待されます。

○留学生への影響：小中学校での訪問活動を通じて、自国の地理や歴史、文化について日本

語でプレゼンテーションする機会が与えられます。プレゼンテーションを通じて、児童生徒らの自国への興味を引き起こすことは、留学生にとって大きなやりがいや喜びとなります。また、交流を通じて地域への愛着が深まることで、卒業後の北海道での定住を促進する効果が期待されます。

3. 事業の実施

実施校の募集については、札幌市教育委員会を通じて札幌市内の小中学校に公募しました。応募票や実施時期等をもとに総合的に検討した結果、以下 6 校に決定しました。

日程	訪問先	対象	人数
2024/7/4	札幌市立山の手南小学校	4 年生	75 名
2024/7/8	札幌市立豊園小学校	6 年生	79 名
2024/9/12	札幌市立前田中央小学校	5 年生	92 名
2024/9/18	札幌市立義務教育学校福移学園	6 年生	15 名
		8 年生	9 名
2024/12/4	札幌市立平岡南小学校	6 年生	95 名
2024/12/9	札幌市立共栄小学校	6 年生	80 名

参加者状況

【留学生】 31 名【本学教職員】16 名 ※共に延べ人数

【小学生】436 名【中学生】 9 名 ※共に実人数。実人数は在籍者をベースとしており、当日の欠席者数は把握していません。

札幌市立山の手南小学校

2024 年度の第 1 弾は、7 月 4 日（木）にマレーシア、ミャンマー、中国、香港からの留学生有志 5 名が、札幌市立山の手南小学校の 4 年生を訪問しました。ニュージーランド出身の英語教員・デントン講師による「この日本食は英語で何という？」クイズで緊張をほぐした後、留学生とデントン講師がそれぞれの母国の地理や食べ物、日本とは異なる文化などを紹介し、大いに盛り上がりました。

その後、小学生からコマ回し、だるま落とし、将棋、紙相撲、おりがみなど、日本の昔ながらの遊びをグループごとに留学生に紹介し、一緒に楽しみました。どのグループも、看板や見本、遊び方の説明を丁寧に準備してくれていたため、初めて体験する留学生も安心して参加することができました。

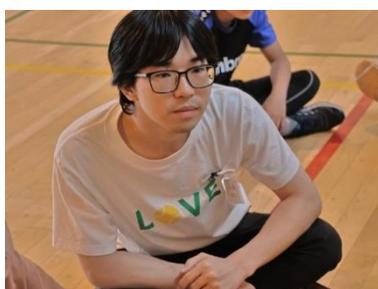


札幌市立豊園小学校

7月8日（月）、マレーシア、ミャンマー、台湾、中国からの留学生有志6名が、札幌市立豊園小学校の6年生を訪問しました。

台湾出身の英語教員・陳講師による“Head, Shoulders, Knees & Toes”を歌いながら体を動かすウォームアップで緊張をほぐした後、留学生たちは母国の地理や食べ物、子どもの頃の遊びなどを紹介しました。小学生たちは、マレーシアと日本の果物の価格の違いや、中国の気候・風土がその土地独特の食文化を生んでいることを学び、驚きの声を上げていました。

その後、留学生に日本文化を紹介するテーマのもと、児童一人ひとりがタブレットを活用し、お城、日本食、侍、着物、曲げわっぱなどについて発表しました。留学生たちは各発表に興味深く聞き入り、「小学生であれだけのスライドが作れるのはすごい」「知らないことが多く、とても勉強になった」と、充実した表情を浮かべていました。



札幌市立前田中央小学校

9月12日（木）、マレーシア、ミャンマー、インドネシアからの留学生有志5名が、札幌市立前田中央小学校の5年生を訪問しました。台湾出身の陳講師による四択クイズで緊張をほぐした後、留学生と陳講師が、それぞれの母国の地理や食べ物、日本とは異なる文化などを紹介し、大いに盛り上がりました。

その後、小学生はグループごとに留学生のブースを訪れ、質問をしたり、各国の「あっち向いてホイ」やじゃんけんを教えてもらったりしながら、楽しい時間を過ごしました。お別れの会では、小学生たちがサプライズでソーラン節を披露しました。留学生にとって小学生の演舞を見るのは初めてだったこともあり、「一生懸命でかっこいい！」「かわいい！」と感激の声が上がっていました。



札幌市立義務教育学校福移学園

9月18日（水）、マレーシアとベトナムからの留学生有志4名が、札幌市立義務教育学校福移学園の6年生と8年生を訪問しました。台湾出身の陳講師によるウォームアップで緊張をほぐした後、8年生が留学生に向けて福移学園に関する True or False クイズを出題。留学生が答えを推測した後、6年生が出演する学校紹介ビデオを見ながら、答えを探しました。留学生たちはクイズを通じて福移学園について学ぶだけでなく、日本文化にも触れることができ、大いに盛り上がりました。

続いて、留学生と陳講師が、それぞれの母国の地理や、日本に来てカルチャーショックを受けた体験、母語での簡単な挨拶を紹介しました。児童生徒たちは、「マレーシアとベトナムの魅力を先生たちにプレゼンする」というミッションのもと、真剣な眼差しで留学生の話に耳を傾け、行ってみたい場所や食べてみたい料理、それぞれの国で気をつけたいマナーなどを熱心に書き留めていました。活動を終えた児童生徒からは、「ベトナムに行きたい！」「マレーシアに行きたい！」「同じアジアの国でも、日本とは文化や常識が違って面白かった。もっと知りたくなった！」といった感想が寄せられました。



札幌市立平岡南小学校

12月4日（水）、マレーシア、ベトナム、ミャンマー、韓国、台湾からの留学生有志6名が、札幌市立平岡南小学校の6年生を訪問しました。台湾出身の陳講師によるサンタクロースクイズで緊張をほぐした後、留学生が母国の地理や食べ物、日本とは異なる文化などを紹介し、大いに盛り上がりました。続いて、「留学生に日本文化の魅力を発信しよう」というテーマのもと、児童たちによるグループ発表が行われました。タブレットや小道具を活用したプレゼンテーションに加え、空手の実演や紙ねんどで作った握り寿司の披露、さらにはアニメや映画の再現など、どれも発想力と工夫が光る素晴らしい内容でした。

最後には児童から「WISH～夢を信じて～」の歌のプレゼントが贈られ、感動的なエンディングとなりました。



札幌市立共栄小学校

12月9日（月）、マレーシア、中国、台湾からの留学生有志5名が、札幌市立共栄小学校の6年生を訪問しました。台湾出身の陳講師によるサンタクロースクイズで心も体も温まった後、留学生が母国の地理や食文化、小学校生活などについて発表しました。続いて、児童たちはタブレットを活用し、マレーシア、中国、台湾、ベトナムと日本の小学校生活の違いについて調べ、まとめた内容を

発表しました。通学方法や給食の内容、学ぶ科目、昼休みの長さなど、さまざまな違いを発見し、それらが各国の地理や文化と深く関係していることを学んだようです。

発表後は児童たちが留学生や教職員に積極的に質問したり、一緒に手遊びを楽しむ姿も見られました。最後は児童たちがアーチを作って玄関まで見送り、心温まる交流会となりました。



4. 今期活動において評価できる点

○訪問する留学生の国籍が多様であるため、小中学生にさまざまな文化を体験する機会を提供でき、異文化理解の促進に貢献することができました。また、訪問した小学校の幾つかでは、留学生との交流前に参観日で保護者に発表を見てもらい、そこで反省したことやアドバイスされたことを反映し、一つレベルアップした形で交流に臨むことができたことと交流校教員より伺いました。本交流が児童にとって「楽しい活動」に留まらず、事前準備から当日運営、そして振り返りまで、学習へのモチベーションを高く維持する効果があると感じられました。

○何度も参加してくれる留学生が一定数おり、そのような学生たちのプレゼンテーション能力は、小中学生に合わせた形で格段に向上しています。また、普段接することのない他国の留学生と協力する楽しさや、小中学生から直接お礼を言われたり、後日学校から手紙を受け取ることで、やりがいや喜びを感じていました。大学での学びに加え、本活動は異国での生活の素晴らしい思い出となり、今後社会に出る際の心の支えになることが期待されます。

5. 今後の課題

昨年度同様、今年度の活動でも留学生ボランティアの募集に追われる状況が続きました。昨年度の9校から6校に減らしたものの、留学生ボランティアの確保が課題となり、依然として余裕がない

状況でした。次年度は、先輩留学生や教職員による啓発活動をさらに強化し、より円滑に学生募集ができる仕組みを検討する必要があります。しかし同時に、プロジェクトが持続可能なものとなるよう、参加する留学生にとって無理のない範囲での交流に配慮することも重要だと感じています。

6. 2025 年度の展開

今年の実験を踏まえ、次年度も引き続き訪問先を最大 6 校に絞った交流を計画しています。また、訪問先や実施時期についても、札幌市教育委員会との連携をとり、調整の上進めていきます。

総括：陳 堯柏（札幌国際大学観光学部国際観光学科）

松村 知美（札幌国際大学国際課）

令和6(2024)年度 地域・産学連携センター共同研究報告

2024年度

沼田町とのスポーツ健康領域に関する連携事業に関する報告書

札幌国際大学スポーツ人間学部スポーツ指導学科

佐藤文亮、国田賢治

【はじめに】

沼田町に暮らす方々を対象に、沼田町と連携して、スポーツ健康連携事業を実施してきている。令和6年度は、高齢者対象の健康づくり等の講話・教室、および児童や生徒対象のスポーツ教室（卓球）を実施に関する打ち合わせを行った。さらに、中長期的な視点からの連携を模索するために、官学連携意見交換会を定期的に行った。また、沼田町が主催するマラソン大会（マラニック）に対し、協働型連携を行った。

【スポーツ教室に関する打ち合わせについて】

沼田町地域再興の観点をふまえて、令和6年度は、中学校における部活動活性化（卓球）に関する取り組みとして、児童や生徒対象のスポーツ教室実施の可能性について、複数回打ち合わせを行った。具体的には、スポーツ教室を通じた沼田町の中学校部活動の活性化のきっかけを作り、それに伴う地域への定住化と地域活性化の可能性について打ち合わせを行った。また、認定こども園児、小学生、中学生などの子どもを対象としたスポーツ教室の実施により、中学校部活動への段階的活性化を図る可能性について話し合いが行われた。

【マラニック 2024 の活動について】

2024年7月20日（土）に開催された、沼田町開拓130年記念事業「ほたるの里夏のSNOW マラニック 2024」に、スポーツ健康指導研究科や観光学研究科の大学院生と、観光学部の大学生が、協働型連携の一環として、運営の補助に参加した。マラニックは、自分のペースで無理なくピクニック感覚でマラソンを楽しめるスポーツ

事業であり、10キロコース、30キロコース、さらには8キロのファミリーコースのいずれかに、ランナーが参加する。事業に参加した大学生および大学院生は、ランナーの受付対応やクロック対応などの運営補助業務の他、ガイドランナーとして参加者と一緒にコースを回る業務を担当し、沼田町の特産品等が味わえる休息所などでランナーとスポーツ交流を行った。運営補助業務では、事業担当者の指示を受けながら、ランナーの受付対応やクロック対応がスムーズになるように学生間で役割分担を行って連携をはかり、効率的な運営がなされるように対応している様子が見られた。ガイドランナー業務では、ランナー集団の最後尾を走り、途中でコースがわからなくなないように補助する役割をこなした。ガイドに参加した学生14名がマラソンコースの中継地点で待機し、スタート時点からゴールまでたすきを繋ぐ形で連携して業務を遂行していた。大学生はスマートフォンなどを活用しながら、業務の進行状況をリアルタイムで共有し、スムーズな業務進行を行っており、大変頼もしかった。また、一般ランナーの方と積極的にコミュニケーションを図り、スポーツイベントが地域活性化に果たす役割を学習している様子だった。参加した学生からは、「炎天下の中で業務を遂行する大変さはあったが、大学で学んだイベントマネジメントやスポーツマネジメントの知見を現場で活かすことができたとともに、地域ならではの特性や特産物を活かしたイベント運営を行い、地域活性化につなげる手法を学ぶことができた。とても良い経験となった」などのフィードバックコメントがあり、大学生の実践型の学習機会として十分な役割を果たしていることが示唆された。沼田町マラニック実行委員会の担当者様からは、イベント終了後に、「イベントへの参加者が過去最高人数となった状況の中、参加者の皆様の笑顔があふれる形で無事に成功することができたのは、大学生の協力によるところが大きかった」と感謝のお言葉をいただいた。

【来年度の実施予定について】

令和7年度は、高齢者対象の健康づくり等の講話・教室、および園児、児童や生徒対象のスポーツ教室（卓球）を実施する予定である。さらに、中長期的な視点からの連携を模索するために、官学連携意見交換会を定期的に行う予定である。また、沼田町が主催するマラソン大会（マラニック）に対し、協働型連携を行う予定である。

【写真】



写真 1：学生の事業運営補助の風景①



写真 2：学生の事業運営補助の風景②



写真 3 : 学生の事業運営補助の風景③



写真 4 : 学生の事業運営補助の風景④



写真 5 : ランナーの参加風景

札幌国際大学地域・産学連携センター年報 第 9 号

2025(令和7年)年6月 発行

編集 札幌国際大学地域・産学連携センター
発行 札幌国際大学

〒004-8602 札幌市清田区清田4条1丁目4番1号

電話011-881-8844 FAX011-885-3370
